

小通事・朴徳源の再検討

岡 部 良 一

はじめに

朴徳源については一般的に江戸中期の朝鮮通信使小通事とされ、残されている墨蹟も少なくない^①。しかし何時来日した者か、研究者によって意見が分かれているのが現状である。なぜこのようなことが起きるかと言えば、各次の使行録を始め、内外の史書に彼の名が見えず、また通訳の事故とか、途中交替したという記事も見当たらない。謎の人物と言われる所以である。そこで日本に残された筆蹟や記録を詳細に再検討し、その実態に迫ってみたい。

彼の人物像を考える上で管見に及んだ史料は次の通りである。

①扇面詩歌（『大系朝鮮通信使・巻6』所載）

（順不同）

はるをしる まがきの竹の 朝露ハ

千代もかハラぬ いろやそふらん 朝鮮 聾窩

五言律詩「渚雲低暗度 関月冷相隨」 朝鮮 朴徳源

日本法眼周圭画の賛。

☆唐崔塗「孤雁」より抜粋。

②七言律詩「湖添水色消殘雪 江送潮頭湧漫波」（李元植

氏蔵）

☆唐元稹『元氏長慶集』卷二二。「和楽天早春見寄」より抜粋。

③七言詩「花逢皓月精神好 月見奇花光彩舒」(李元植氏蔵)

☆宋邵雍『伊川擊壤集』卷六。「花月長吟」より抜粋。

④七言律詩「龍 旌旗日暖龍蛇動 宮殿風微燕雀高」朝鮮朴徳源書(李元植氏蔵)

☆唐杜甫「奉和賈至舍人早朝大明宮」より抜粋。

⑤軸物(建仁寺両足院蔵) 安倍仲麻呂の五言排律(朴徳源書と和歌(趙景安書)が並ぶ。仲麻呂の唐名は晁卿。晁衡。

☆『全唐詩』卷七三二、「衛命還国作」より抜粋。

和歌「天の原 振さけ見れば かすがなる 三笠の山
に いでし月かも」が続く。

⑥「淇園」 朝鮮朴徳源書(李元植氏蔵) 春秋時代、衛にあつた園の名。『述異記』に「衛有淇園、生竹」とある。

それとも儒学者柳沢淇園か皆川淇園を指すか。

⑦京都府亀岡市曾我部の金剛寺の扁額

「為日本国僊叟 金剛窟 朝鮮朴徳源書」

⑧三重県鈴鹿市白子本町の青龍寺の肉筆扁額

「體用山 朝鮮朴徳源書」

⑨『楽郊紀聞』卷一〇(東洋文庫)

同じ小通事朴徳源というもの、西館に來りし時、御送使屋に、法師と女とを一幅に書し掛物を見て、「珍しや法師の前に女とは」と申せし由。此者「西東同じ心の月見哉」と云句を詠ぜしもの也。是も此方の語に能く通ぜしものと見ゆ。但文化信聘の始まりし後に、訳使等が姦計の事に党して、彼国より、館近辺にて刑せし由也。

次にこれらの史料から判明することを列挙する。

・ 朴徳源は小通事として日本語は勿論、漢詩文・和歌・俳句にも精通した人であった。

・ 漢詩は杜甫・崔塗・元稹・安倍仲麻呂や邵雍等の唐宋詩の一部を写したもので、独自の作は無く、原典に当たるなど事前準備が必要と思われるものが多い。

・ ①の落款により彼の号は「聾窩」である。

・ ⑤より朴徳源と趙景安は同僚と思われるが、二人とも通信使小通事の座目に見えない。趙景安も和歌・俳句に精通し作品を残している。^④

・ ⑦⑧から寺院の扁額のものになった書も揮毫している。

・ ⑨より釜山草梁倭館の西館や御送使屋に出入りした小通事と判明する。^⑤

朴徳源の遺墨は右以外にもあり、今後も見つかる可能性が高い。^⑥

それにしても他の通信使一行の随員の場合と比較し一度にしては彼の墨蹟が多すぎる。通信使の来日時、日程が厳しく身分の低い中官の小通事は現場の対応に追われ、時間的余裕がなかったはずである。ちなみに和歌や俳句に長けた訳官について『通航一覽』は玄徳淵と聖欽(李明和)の二人を挙げているが、玄徳淵は延享度(一七四八)の堂上訳官、李明和は宝暦度(一七六四)の次上通事であり、高官である。また全国に残る通信使関連の寺院扁額を見るに、その揮毫者は朴徳源を除いてすべて写字官など高官である⁸⁾。これらから朴徳源は元々江戸まで行った通信使一行の中にはいなかったのではないかと、この疑問が湧く。そこで限られた史料を手掛かりにこの点を考察していく。

二

まず①扇面詩歌に見られる法眼周圭であるが、『古画備考』によると、大坂の絵師吉村周山の子で、吉村充貞のことである。『国書人名辞典』によると父の周山は大岡春とと並び称され、没年は安永五年(一七七六)。つまり法眼としての周圭の活躍はそれ以後である。『大阪人物誌』によれば「寛政頃の人」という。『大系朝鮮通信使・巻6』では周圭と周山を混同している。

次に⑦京都府亀岡市曾我部の金剛寺扁額の「為日本国僊叟」を検討する。山門棟札によると、鐘楼を兼ねた楼門型の山門は明和八年(一七七二)六世磐山和尚の代に播州加東郡来住村棟梁によって建立されている。金剛寺年譜によれば、僊(仙)叟和尚は金剛寺の七世。六世磐山の没年は天明六年(一七八六)十月十九日、僊叟は文化十一年(一八一四)の没。つまり僊叟が住職であった時期は天明六年以後で文化十一年までの凡そ二八年間であった。扁額の成立は、僊叟が住職となった早い時期と思われる。棟札には「現住叟」とあり、扁額は僊叟の為に書かれている。つまり僊叟が寺を継承した時山門は建立されていたものの扁額が無かった、そこで朴徳源に書を依頼したと考えるのが自然である。棟札は扁額設置と同時に製作されたと思えるが、残念ながらその年記は書かれていない。僊叟は位牌に「前臨川当山再中興仙叟鳳西堂和尚大禪師」と見え、金剛寺の発展に尽した僧侶であった。

最後に⑨『楽郊紀聞』の「文化信聘の始まりし後に」処刑されたという記事を確認する。「文化信聘の始まり」とは第十二次(文化八年・一八一二)の来聘準備段階からの長い動きを指す。その具体的始まりは文化元年六月に幕府は来る己巳年(一八〇九・文化六年)の対馬聘礼を決定する。それが対馬藩を通して朝鮮に伝えられたのは文化二年

十一月のこと。「訳使等が姦計の事」とは、この交渉の始まる直前の純祖五年（一八〇五・文化二年）八月、朝鮮に

おいていわゆる奸訳の偽造書契事件が発覚。『邊例集要』

卷十四雑犯にその概略がみえる。それによると、十年以前の丙辰（寛政八年）、対馬において堂上訳官朴俊漢・朴致儉らが文書・公印を偽造し、独断で易地通商を行い報酬を得ていたことが判明。しかし二人はすでに死亡、同様の行動をその後も繰り返し返していた偽造書契の崔瑀・崔国楨、写書契の朴潤漢、刻図署の金漢謨の四名を純祖五年九月六日草梁前路で梟首し落着する。田保橋潔の研究によるとこの罪状は秘密にされ、『承政院日記』や『日省録』には見えないという^①。処刑された四名はいずれも高官で、それに連座した下級役人も重罪とされたのであろう。朴徳源は下級通訳のため名前は省かれたのである。その後両国の折衝は続き、当初の予定は伸び文化六年に準備のための訳官使が対馬に渡り、文化八年に対馬易地聘礼が実現する。つまり朴徳源は第十二次文化度通信使実現の前に処刑されていたのである。

以上三史料を勘案すると、朴徳源は第十次延享度・第一次宝暦度・第十二次文化度通信使の随員には該当しない。通信使座目の小通事に名前が無いのは当然である。ではどう考えるか。

三

十二度の朝鮮通信使以外に小通事を伴った「朝鮮渡海訳官使」と呼ばれる釜山と対馬を結ぶ交流が五六回もあったことはあまり知られていない。この方面の研究もまだまだ遅れているという指摘もある^②。第十一次宝暦度から第十二次文化度までの間、朝鮮渡海訳官使の対馬行は七回ある^③が、このうち朴徳源が対馬に渡ったと思えるのは安永九年・天明三年・天明七年・寛政八年の四度である。それは初期の明和三年と明和五年は共に海難事故に遭遇し犠牲者も多く、再開は十二年後で、小通事も新しく入れ替ったと思えるからである。もちろん文化六年は処刑後で該当しない。朴徳源が対馬に渡ったのは安永九年（一七八〇）から寛政八年（一七九六）まで、その後の日本人との接触は釜山草梁倭館にて文化二年の事件発覚まで続く。小通事としての活躍は凡そ二五年、この間に朴徳源らは日本人の要求を入れ、唐宋詩や和歌・俳句、更には寺院の山額を書き報酬を得ていたのではあるまいか。これが墨跡の多い理由である。

この仮説を史料に当てはめると、①は寛政八年、⑦は天明七年か寛政八年、但し天明七年は徳叟の住職就任直後であまり早く、恐らく次の寛政八年であろう。この時の堂

上官（正使）は朴俊漢・崔昌謙、堂下官（副使）は林瑞茂、総員六八人。八月二十九日対馬国府中着。九月六日藩主茶礼挙行、十月九日以酌庵宴席、十一月九日府中出帆。十二月十三日釜山帰着。対馬滞在は約二ヶ月もあり、書や軸物を書くゆとりは十分にあった。¹⁵寛政八年といえれば例の「奸訳の偽造書契事件」¹⁶が起きた年である。六八名中の小通事は四人程と思われ、その中に朴徳源や趙景安がいたのではなからうか。

これを裏付けるものとして、最近公開された^⑤建仁寺両足院蔵の掛軸に注目したい。なぜ両足院に朴徳源の揮毫があるかと言えば、輪番僧として両足院から対馬へ赴任し以酌庵六〇世となった高峰東峻と関係する。その期間は安永八年（一七七九）六月より天明元年（一七八一）五月までの三年間で、両足院出身の輪番僧は延宝年間の雲外東竺以来凡そ百年ぶりの赴任であった。¹⁷この期間の訳官使は、安永九年（一七八〇）十一月二七日来島した堂上官崔鳳齡・玄啓根、堂下官卞世謙の一行のみである。¹⁸つまりこの掛軸は両足院高峰東峻と朴徳源が接触した確実な証である。朴徳源にとつてこの時が初めての渡海と思われる。

対馬府中には以酌庵を中心に^⑦金剛寺や^⑧青龍寺の関係者、^①法眼周圭画の賛を求める人達が集まり、中には朝鮮人の書画を売買する目的の者までいたのである。すると

⑥「淇園」は皆川淇園を指す可能性が高い。¹⁹淇園は同時代の人であり、通信使に二度接触、朝鮮文化に関心を持ち、しかも円山応挙に師事し絵画にも優れていた。金剛寺は応挙寺とも呼ばれ、応挙との関係が深い。この書は金剛寺の扁額と同時代の作品ではあるまいか。

ともあれ多くの日本人が朝鮮人の墨蹟を求めたことは事実で、各使行録にその様子が記録されている。特に宝暦度では「唐人殺し」事件があり、その後はそれに因んだ歌舞伎の上演、『宝暦物語』等多くの読本も出版され一種の異国ブームが起きていた。文化年間の場合も、対馬において上判事下文圭（号梅軒）が遠く丹後峰山の全性寺や長安寺の山額揮毫を依頼された例もある。²⁰以上の考察に大過無ければ、すべての史料が合理的に説明出来るよう。

おわりに

要するに朴徳源は江戸まで行った朝鮮通信使の小通事ではなく、安永九年から寛政八年にかけ、数度にわたり対馬に來航した朝鮮渡海訳官使の小通事であった。日本に残る彼の墨蹟の多くはこの時、対馬で書かれたものであろう。ところで最近、朴徳源第十一次宝暦度通信使説が一人歩きしており憂慮している。²¹今後、夥しい対馬宗家文書の中から

ら彼に関する新史料の発見が期待されるところである。

(おかべりょういち 朝鮮通信使縁地連絡協議会会員)

註(1) 『朝鮮通信使と京都』 高麗美術館。二〇一三年。コラム

・貫井正之「日本所在の朴徳源遺墨」。氏によれば朴徳源の遺墨は現在一六点確認出来るといふ。

(2) 例えば辛基秀氏は第十次と推定。(辛基秀・仲尾宏編『大

系朝鮮通信使・巻6』一九九四年・明石書店) 六四頁。

上田正昭氏は第十一次とする。(『朝鮮通信使とその時代』

二〇〇一年・明石書店) 一七五頁。

(3) 各次の朝鮮通信使小通事の座目は次の通りで朴徳源の名前はな

十次延享度(一七四八年)：九名、洪景海『随槎日録』による。

一〇名、『通航一覽』。共に人名を欠く。

十一次宝暦度(一七六四年)：一〇名。趙暉『海槎日記』

朴再会、朴泰萬、金分雄、朴斗応、朴尚点、朴元興、

金聖徳、朴致祥、田致白、金徳重。

十二次文化度(一八一一年)：一〇名。金履喬『辛未通
信日録』

朴遇春、李福采、朴和得、金宗福、朴守雄、金日彦、
金龍象、金成大、李千成、許道信。

(4) 李元植『朝鮮通信使の研究』(一九九七年・思文閣出版)

第四部第一章「通信使の遺墨」。趙景安の遺墨四点(俳句三・和歌一)を紹介。

(5) 草梁倭館については田代和生「草梁倭館の設置と機能」

(『近世日朝交通貿易史の研究』第七章。一九七七年・

創文社) に詳しい。

(6) 最近、愛知県豊明市阿野町の個人宅で朴徳源の肉筆掛軸が発見されたが未見である。

(7) 『通航一覽』巻百十一「朝人詠歌」

(8) 現存する朴徳源以外の朝鮮通信使寺院扁額

☆第五次寛永度：◆螺山(朴安期)・製述官「瑤瓊世界」。

◆申濡(竹堂)・従事官「栄攝院」。

☆第六次明暦度：◆翠屏(趙暉)・正使「興国」。

◆雪峰(金義信)・写字官(第五次にも来日)「神撫山」

「禪昌寺」。「江国寺」。「金湯山」。「方丈」。「海上禪林」。

「萬松山」。「龍潭寺」。

☆第七次天和度：◆洪世泰・子弟軍官「禪源寺」。

◆雪月堂(李三錫)・写字官「萬象寺」。「牛欄寺」。

◆東嶽(咸悌健)・画員「法城山」。

☆第八次正徳度：◆平泉(趙泰億)・正使「大智山」。「桃

源」。◆貞谷(李寿長)・写字官「巨壑山」。◆花菴(李

爾芳)・写字官「鳳凰山」。「南林山」。「古禪林」。「曼珠

室利殿」。「瑞泉山」。「祥雲寺」。◆海峯(金時暉)・押

物通事「広忠寺」。◆錦谷(玄徳潤)・上通事「東海名区」

「潮音閣」。◆李邦彦・従事官「日東第一形勝」。

☆第十次延享度：◆洪景海・子弟軍官「対潮楼」。

◆玄 文亀・写字官「靈寶山」。

◆金天秀・写字官「海岸庵」

☆第十一次宝暦度：◆洪聖源・写字官「瑠璃界」。

◆李 彦佑・写字官「密花園」「雲頂峯」。

☆第十二次文化度：◆梅軒（下文圭）上判事「全性寺」。

◆拈華山。《揮毫者名・官職・扁額文の順》

(9) 『古画備考』二十六「吉村周山」。

周山―男周圭 法眼 吉村充貞―周南 吉村充國」とある。

(10) 『新修亀岡市史・資料編第四卷』一九九六年。六八頁。

(11) 田保橋潔「朝鮮国通信使と易地行聘考・第五倭学訳官獄

註一五」(『近代日鮮関係の研究』下。一九七二年・棟高

書房)

(12) 仲尾宏「朝鮮渡海訳官使と対馬藩」(『朝鮮通信使と徳川

幕府』一九九七年・明石書店)、辛基秀「最後の朝鮮通

信使」(『朝鮮通信使』一九九九年・明石書店) 共に訳官

使の研究の遅れを指摘。

(13) 『対外関係史総合年表』吉川弘文館。一九九九年。仲尾

宏「朝鮮渡海訳官使と対馬藩・表1江戸時代朝鮮渡海訳

官問慰行」参照。(『朝鮮通信使と徳川幕府』一九九七年

・明石書店)

明和三年、同五年、安永九年、天明三年、同七年、寛政

八年、文化六年の七度。

(14) 『対外関係史総合年表』に次の記載がある。(概略)

◎一七六六年(明和三) 七月十九日訳官使、釜山出港後

暴風のため行方不明。生存者九名、漁民が救助。(『増
正交隣志』『辺例集要』『宗氏家譜略』などに記載)

◎一七六八年(明和五) 五月三日来島。八月九日帰国途

上の訳官使中官、対馬国西泊にて破船死没。十六日堂

上訳官豊浦にて破船死没。二十日中官佐須奈にて破船

死没。(『宗氏家譜略』のみの記録)

(15) 田保橋潔「朝鮮国通信使と易地行聘考・第四戊午易地行

聘約條の成立」(『近代日鮮関係の研究』下・所収) 六九

〇頁。

(16) 仲尾宏「朝鮮渡海訳官使と対馬藩」(『朝鮮通信使と徳川

幕府』)、三二一頁。

(17) 田中健夫「対馬以酌庵の研究・以酌庵歴代住持一覽」参

照。(『前近代の国際交流と外交文書』所収) 一九九六年。

吉川弘文館。

(18) 註(13) 参照。

(19) 皆川淇園は享保一九年(一七三四) 生・文化四年(一八

〇七) 没。ちなみに柳沢淇園は宝暦八年(一七五八) 没

で該当しない。

(20) 「朝鮮通信使研究部会報」縁地連朝鮮通信使関係地域史

研究会。十三号・十五号、仲尾宏氏の報告参照。

下文圭は文化六年と文化八年の二度対馬に渡る。

(21) 寺院の扁額に関する新聞記事やパンフレット類にその傾

向が強い。